

ときめき インタビュー



…プロフィール…

1977年12月24日、越谷市生まれ。桜井小学校を経て、私立海城中・高校へ進学。高校1年生のころ、作曲家を志し、1997年、桐朋学園大学作曲理論学科に入学。同大学2年生で、指揮の勉強を始め、2001年、東京藝術大学指揮科に入学。現在同大学大学院修士課程3年在学中。2005年、劇団四季のミュージカル『オペラ座の怪人』の指揮者に抜てきされ、現在公演中の『ウィキッド』ではレギュラー指揮者を務めている。

『オペラ座の怪人』を指揮したい、と思った2日後の運命の電話

井上さんと劇団四季との出会いは2005年、芸大院生1年生のときでした。

「突然、『オペラ座の怪人』レギュラー指揮者の西野さんより、エキストラの指揮者を探している、とのことのお電話をいただきました。でも、即答はできませんでした。アマチュアオーケストラや合唱団の指揮はしていましたが、プロの仕事で長期間、というのは初めての経験。やりたけれど、怖い。かなり悩み、両親にも相談し、結論を出したのは2週間後くらいだったと思います。悩んで出した結論は、実は運命だったのかもしれない。

「僕の場合、初めて聴いたときから印象に残る曲は少ないのですが、『オペラ…』は1回聴いただけで好きになりました。以来家のピアノでよく弾きましたが、自分が将来この曲を指揮するとは夢にも思っていないませんでした。指揮のお話をいただく数年前のことです。それから、ちょうど劇団四季の『オペラ座の怪人』のポスターを見たとき、こ

その2日後に電話がきたので、正直、運命かな、と思いました。」

『人生は劇場だ』。

運命の曲に呼ばれた指揮者。そんな井上さんは、もともと作曲家志望でした。高校1年生のころから作曲家を志し、桐朋学園大学に入学。「作曲の勉強をする過程で、指揮の勉強が役立つのではないかと、いう理由で学び始めたのが転身のきっかけです。最初はピアノ2台を相手にタクトを振ったところ、「すごい高揚感がありました」。超難関といわれる芸大指揮科に合格したとき、迷う背中を押してくれたのはピアノの指導を仰いだ花岡先生の言葉。「1年でも早く芸大に入って指揮を勉強しなさい、と励ましてくださいました。」

特に心に残っている言葉については、「桐朋学園大学の授業中に鍋島先生にいただいたシエイクスピアの『人生は劇場だ』、という言葉です。あえて説明するならば、本当の自分は違っても、もし自分がなりたいたいものがあるならば、もし堂々としたも

のにそこががあるのなら、それを演じたい、という意味だったと思います。」

ミュージカルとオーケストラ、指揮の違いは

「ドラムをこける」こと

オーケストラだけのときとの指揮に違いは？との質問に、「ミュージカルでは、ドラムをつくらなければなりません。役者さんが変わればテンポも変わる。今日は（歌が）早い、強い、など瞬時に判断し対応できるよう、常に集中しています。夜6時半の公演でも、朝からずっと、

公演のことを考えています。」

現在、『ウィキッド』のレギュラー指揮者を務めて感じることについては、「お客さんの大きな拍手が力になります。演奏者だけでなく、お客さんとも気持ちが一つになること、それを目指して指揮しています。」

また、「これまで、オーケストラと一つになれるような気がすることがあります。そういうときは、ものすごく良い音がします。曲の一部分だけでも一つになった感覚を味わうことができれば、幸せです。」そんな井上さんが尊敬する方は、世界的指揮者のジョン・ミュンフン氏。「彼のすばらしい指揮と音色です。」

楽で、ホールの中すべての人々が音楽に感動しているのを感じられるんです。」

地元、越谷市での思い出

幼いころ習っていたピアノ、元荒川土手でのバッタ取り、それにサンシティでの合唱コンクール。音楽の道に進む基礎は、琴とクラシックレコードの収集が趣味のご両親に育まれたものかもしれません。来年の越谷市市制施行50周年に記念コンサートがあれば、そこで井上さんがタクトを振ってくれたら、幸せですね。



劇団四季指揮者 井上 博文 さん

『人生は劇場だ』。運命の曲に導かれ、なりたいたい自分を演じ、才能を存分に開花する若き指揮者

世界的ロングランを続ける大ヒットミュージカル『オペラ座の怪人』『ウィキッド』。その劇団四季での公演で指揮を務める、井上博文さんに、指揮者になるきっかけや音楽への思い、越谷市での思い出などを伺いました。



ロングラン公演中
*2008年4月9日(水)～8月31日(日)
公演分のチケットは11月4日(日)発売。
詳しくは、ホームページwicked.jpへ